
colors

湊 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

colors

【Nコード】

N5970Y

【作者名】

湊 翼

【あらすじ】

16歳の誕生日。

美穂奈は政略結婚させられる為に、部屋で軟禁状態にあった。

そこで、毎年誕生日になると現れる不思議な本を見つける。

いつも何も書いてないその本に、今日は金色に光る文字が浮かび上がった。

惹きつけられる様にその文字を目と指で追った美穂奈は、最後に文字が浮かび上がった瞬間、光に包まれ、気付くと知らない場所に立っていた。

……各題名にあまり意味はないです。題名センスないので、適当に付けてます。

プロローグ

ヴォルフイン

水狼が鳴き、ラズは読んでいた本から視線を上げた。

水狼は気性が荒い方だが、こんな風に鳴く事はあまりない。

森で何かあったのだろうか？

不思議に思い窓の外をしてみるが、特に何も無い。

首を一度だけ傾げ、ラズは視線を本へと戻した。

緑の革表紙に金の縁取りがある分厚い本。

ページを開けば、そこは真っ白な空白ばかりが続く。

だが、ラズはその灰緑色の瞳でそこに何か書かれているかの様に凝視した。

細く、長い指が、その真っ白いページをそつと撫でると、うっすらと文字が浮かび上がった。

まるで、ラズの指から紡がれているかの様に現れるその文字は、金色に輝きゆつくりと白いページを埋めていく。

ゆつくりゆつくりとページを埋め、最後のページでその光はさらに大きく膨み…。

そして、弾けた。

出来れば今日という日を迎えたくはなかった。

と、自室に閉じこめられた美穂奈は本気みほなでそう思っていた。

今日。

そう、美穂奈は今日で16歳になるのだ。

16歳の誕生日、それは今まで行ってきた誕生日とは違う響きを持つ。

「16歳…。嫌な法律よね。」

呟いて、美穂奈はベッドに突っ伏しる。

そう、16歳。

日本では、女は16歳、男は18歳になると親の同意さえあれば結婚が許されるのだ。

そう、親の同意さえあれば、政略結婚させる年齢という訳だ。

「お義父様とお義母様の為だけど…。」

美穂奈はこの家の本当の子ではない。

小さい頃、両親を亡くし、どうする事も出来ずただ呆然と佇んでいた美穂奈を助けたのが、この家の夫婦であった。

だから、美穂奈は、この家に対して凄く恩を感じていた。多少の事なら頑張れる。

勉強も、運動も、礼儀作法だって、一生懸命に頑張った。

彼等の期待に応えられるよう、一生懸命に。

だけど…。

「結婚かあ…。」

呟いて、思い出す。

なんともつまらないあの婚約者の事を。

そう、あれは初めて顔を合わせて、庭で散歩した時の事だ。

彼はこう言った。

「あなたの様な素敵な人が僕のお嫁さんで本当に良かったです。あなたとなら、きっと良い家庭を築けると思います。」

と…。

何とも型にはまった定型文。

庭に出る前に少し「ご趣味は？」「お茶を少々」という、やはり型にはまったやりとりを少ししただけで、私の一体何がわかるというのか。

どこをどう見て、何を基準として、私が素敵な人なのか。

そう思うと、吐き気がした。

そして、この人との先が見えてしまった。

型にはまった、つまらない結婚生活。

そんなものを強いられ一生生きていくのかと思うと、急に嫌になったのだ。

…だからと言って、逃げ出す勇気などないのだけれど。

固く閉ざされた部屋のドアを見て、美穂奈は自嘲気味に笑う。

そう、逃げる勇気なんてないのだ。

なのに、あの両親は一体私がどこに逃げると思ったのだろう。

逃げる場所なんて、どこにもないのに…。

ジツとしてると、時計の音が煩わしく、ゴロンゴロンと無意味にベツドの上で転がる。

「痛っ！」

と、何か固い物にゴツンと頭をぶつけ、美穂奈は転がるのを止め、体を起こした。

無駄にふかふかなこのベッドの上に、一体何なんだと思った私は、ソレを視界にとらえビクリと体を震わせた。

赤い革表紙に、金の縁取りが付いた分厚い本。

「今年も…、なの？」

呟いて、美穂奈はソレにそつと手を伸ばす。

ずっしりとした重みが、掌と心の奥底に刻まれる。

指先でそつと撫でてから、美穂奈は視線を巡らせる。

今、この部屋には自分しかいなく、そして、唯一の出入り口であるドアはやはり固く閉ざされている。

そうすると、やはりこの本は…。

そつと、ページを捲ってみる。

白く眩しいページが、どこまでも続く。

かなり分厚い本だが、さすがに何も書いてないとパラパラと繰るだけで終わり、あつと言う間に最終ページに到達した。

「やっぱり、あの本なのね…。」

何も書いてない。

何も書いてないからこそ、美穂奈はこの本が毎年見ている物と同じ

だと判断出来た。

何も書かれていない不思議な本。

毎年、美穂奈の誕生日になると突然現れる不気味な本。

「仕方がないわね。」

呟いて、美穂奈はその本をそつと枕元に置いた。

ちなみに、不気味だからと投げ捨てたり燃やしたりしても、いつの間にか戻ってくるので、余計に気味が悪い。

それならば、今日という日が終わるまでどこかその辺に置いておく方が幾分かマシである。

今日が終われば、この本はやはり知らない間に消えているのだから。その時、外から犬の遠吠えが聞こえ、美穂奈は顔を上げた。

滅多な事がなければ鳴かない様に躡られている番犬が鳴いている。珍しい、泥棒でも入ったのだろうか？

不思議に思い窓の外を見てもみるが、特に何も無い。首を一度だけ傾げ、美穂奈は視線を部屋の中へと戻した。

瞬間、ビクリと体が震える。

枕元に置いてあった、あの赤い本が、ひとりでに表紙を開いたのだ。風ではない。

というか、もし風が吹いたとして、革表紙に金の縁取りがあるあの本の表紙を捲る事なんて無理だろう。

「な、何？」

恐る恐る近付くと、真っ白いページが微かに光っている。

目をこらし良く見れば、それは金色に輝く文字、…の様なものだった。

正直読めない。

つまり、日本語と英語ではない。

フランス語でもないと思う。

…アラビア文字？

最初に抱いた感想は、ソレだった。

模様の様な、でも規則性のある文字の様な、そんな金色に光り輝く

不思議な文字が白いページを埋めていく。

「綺麗…。」

気味が悪いとか、怖いというよりも先に、そう思った。

金色の光は、小さな光の粒子の形で文字の周りをキラキラと彩る。

そっと指を伸ばし、触れてみるが、何も無い。

美穂奈の指にその粒子が付くわけでも、感触がするわけでもない。

けれど、美穂奈はなんとなく、その文字を指でなぞった。

ゆっくりと進むその光を、美穂奈も同じ速度でゆっくりと後を追う。

点字をなぞるかの様に、そっと。

どれくらいそうしていたのかは分からない。

ただ、この追いかけてこもようやく終わりが見えてきた様だ。

最後の白いページ。

そこを、今までと同じように金色の文字は進み、埋めていく。

ゆっくりと、美穂奈が最後の一文を撫でた瞬間、その光は大きく

膨らみ…。

そして、弾けた。

少女と男

「どうしよう。」

やってしまった、と美穂奈は頭を抱えていた。

「いや、だつて急に出来るから……。」

言い訳がましく呟いてから、美穂奈は辺りを見渡し、もう一度頭を抱えた。

木の温もりを感じられる簡素な小屋。

ついさつきまで、自室にいたのに……、どうして？とか、そんな事よりも、だ。

美穂奈は目の前で倒れている男の人を見た。

この男の人が突然目の前に現れた、そう思っていたが、この状況。

ここは美穂奈の部屋でも、美穂奈の家でも、もう一つ言えば、窓の外景色からして、美穂奈の住んでいる街でもなさそうだ。

考えるまでもなく、美穂奈が、突然現れたのだ。

この男ではなく、美穂奈が突然。

なのに。

美穂奈は手の中にある、あの赤い本をギュツと握る。

急に見知らぬ男が出現したと勘違いした美穂奈は、手近にある本で男を思いつきり殴り倒してしまったのだ。

死んではないだろうが、何千ページもある分厚い本の、角。

しかも、金の飾り縁のところ、本の重みに従い腕を振り下ろし殴ってしまった。

しばらくは目覚めそうにない。

美穂奈は一瞬の間、男に手を合わせた。

「ごめんなさい。」

一度、しっかりと頭を下げてから、美穂奈は改めて男を見る。

「……変わった色。」

灰緑の髪に、美穂奈は小さく呟いた。

そういえば、一瞬しか見ていないが、今は閉じられている瞳も同じ色だった気がする。

「ふあ……」

美穂奈は大きくあくびを1つ漏らす。

何だか無性に眠たい。

思いつ切り運動した後の様な気怠さが、睡魔を連れてやってくる。

美穂奈はそれを追い払うように一度頭を振り、これからの事を考えた。

まずは、この人が目を覚ましたら謝って、それからここがどこなのかを聞こう。

で、場所が分かったら、家に連絡してかえ…。

そこまで考え、美穂奈は首を傾げた。

帰って、どうするんだろう。

眠たく、重い頭で考える。

帰ったって待ってるのは、つまらない婚約者様と、恩は感じていても本当の親だとは思えない義両親。

つまらない結婚生活に、終わったも同然の人生。

帰って、どうするの？

どうすれば良いの？

眠いせいだろうか、頭がしつかりと働かない。

少し、眠った方が良いのかもしれない。

眠れば、少しは、マシな打開策が見つかるかもしれない。

美穂奈はそう結論付けると、体を小さく丸め、そのまま床の上に体を預けたのだった。

「どうしよう。」

何が起きたんだ、とラズは頭を抱えていた。

「急に殴られて、えっと……。」

気絶する前の事をゆっくりと思い出しながら、ラズは床で丸くなって寝ている少女を見て、もう一度頭を抱えた。

すやすやと安らかな寝息を立てて眠っている少女。

ついさっきまで、本を読んでいた。

長年かけて解読し読み解いていた本を読み終えてしまい、達成感と明日から何をしたら良いんだろうという虚無感に胸の中が縋い交ぜになって……とかそんな事よりも、だ。

ラズは、目の前ですやすやと気持ちよさそうに寝こけている少女を見た。

突然目の前に現れた見知らぬ少女。

その子は、ラズに何か言うでもなく、聞くでもなく、いきなり殴ってきた。

何か固くて重い物で。

相手を気絶させ、その後家の中を漁り金目の物を盗んでいくなら強盗だ。

気絶させ、トドメをさせば、快樂殺人者が殺し屋かもしれない。

が、相手を殴って気絶させた後に、その場で丸まって寝てしまうのは、いったい何だ？

それは、ラズが知る知識を総動員させても、何にも属さない、意味不明な行動であった。

ラズは首を傾げた。

「何がしたかったのかな？」

呟いてから、ラズは改めて少女を見る。

ふわふわとウェーブのかかった茶色の髪が、床に散っている。

床の木の色と良く似ているから、踏まないようにしなければ。

年々度が合わなくなってきた眼鏡を押し上げ、そう思ったラズ

は、ズキリと痛む頭に一瞬眉をしかめた。

…そういや、何か固く重い物で気絶する程殴られたのだった。忘れていた訳ではないが、目の前で眠るこの少女のせいで考える暇がなかった。

一体、何で殴られたのだろうか？

少女の腕は細く、大きな武器を振り回したりは出来ないだろう。

それに、そんなものを隠す場所もないし。

この小屋に、何かを隠せるだけのスペースも死角もないのは、小屋の持ち主であるラズが一番知り尽くしている。

だとすると、少女が持てるだけの大きさ…あ、もしかしてこれか？

ラズは、少女が大事そうに抱えている本を見た。

長年、自分が読み解いていた、緑の革表紙に金の飾り縁が施してある、あの分厚い本。

「そっか、あれで殴られたのか。そりゃ、あれだけ分厚い本で殴られたら気絶ぐらい…あれ？」

そこでラズは何か違和感を感じる。

少女が抱きかかえている本。

それは、たしかに自分が毎日毎日見てきた本なのに、何かが違う。

「あ…、色…。」

呟いて、確信する。

そう、ラズの知ってる本は、緑の革表紙に、金の飾り縁。

だが、少女が抱えている本は、赤い革表紙に、金の飾り縁。

色が、違うのだ。

「だとすると、やっぱり中身も違うのかな？」

ラズは、そっと少女へと手を伸ばす。

その、赤い本の中身が知りたくて。

やはり、あの緑の本の様に、パツと見は、ただの白紙の本なのだろうか。

指先に、本が当たる。

そっと撫でれば、ザラリとした革の感触。

緑の革表紙と同じ感触だった。

瞬間、少女の瞳がゆっくりと開いた。

髪と同じ、濃い茶の瞳がこちらに向けられ、ラズをとらえた。

あ、ヤバイ。

ラズが咄嗟にそう思ったときには既に遅かった。

「…キヤーツ！」

少女は先程と違い、そう叫んだ後、ラズの頬にあの赤い本を叩きつけたのだった。

疑いと自己紹介

「大変、申し訳ございませんでした。」

美穂奈は勢い良く頭を下げた。

目の前には、赤く腫れ上がった頬を押さえている男。

美穂奈が放った2発目は、不幸中の幸いというのか、表紙の部分が頬に当たった為、男は気絶せずに生きている。

生きてはいるが、機嫌は最悪であった。

それはそうだろうと美穂奈は思う。

もし自分が逆の立場であった場合、美穂奈の機嫌も最高潮に悪いだろうから、このなんとも言えない微妙な空気には納得している。

が、この状況については何1つとして、納得も理解もしていなかった。

なので、唯一の情報源であろう彼がこの状態では、美穂奈もお手上げである。

早く機嫌を直してはくれないだろうか。

そんな希望の元、頭を下げたまま、チラリと男を盗み見る。

目を覚ました彼の目は、やはり髪と同じ灰緑色だった。

日本人にあるまじき不思議な色。

「……………で？」

ビクリ、と、美穂奈は肩を揺らした。

ずっと無言で怒っていた目の前の男が、口を開いたのだ。

「え？」

美穂奈は顔を上げて、首を傾げた。

何を聞かれているのか、わからなかったからだ。

「君は一体、何がしたいの？」

「…はあ？」

問われた言葉に、美穂奈は盛大に首を傾げた。

何がしたいって…。

美穂奈が理解出来ずに呆然としているのを横目に、男は続けた。

「あいにくと、この家には価値のある様な物はないよ。それに、僕は特に恨まれる様な事をした覚えもない。」

「……………はあ。」

美穂奈はとりあえず頷く。

たしかに、この小屋は簡素でパツと見、価値の有りそうな物はない。そしてこの男も、誰かに恨みを買うような感じには見えなかったからだ。

「君の目的が何かは分からないが、とにかく、人の家の床で寝るのはどうかと思う。…出ていってくれ。」

言って、出口である扉を指さす男に、美穂奈は首を振る。

「あの、たしかに、いきなり殴ったり、勝手に寝てしまったりしたのは謝るわ。でも、私の話も聞いて？」

ここがどこなのかも、何故ここにいるのかもわからない状態で外に放り出される訳にはいかない。

美穂奈は必死で男に頼み込んだ。

「私、ここがどこかも、いつの間にかこんなところにいたのかもわからないのよ。本当よ？突然家の中に入り込んだりして、あなたの気分を害したのは謝るから、少しだけお話をしてくれない？」

「…ここがどこかもわからない？何、君、記憶喪失とかでも言うの？」

驚いたように聞いてくる男の言葉に、美穂奈は首をふるふると振って答えた。

「違うの、そうじゃないの。名前だってちゃんとと言えるもの。私は美穂奈よ。美穂奈…、えつと…。」

そこで口を噤み、美穂奈は一度何かを考えるように視線を彷徨させた後、男を見て困った様に笑った。

「だからね、その…。あなたの名前も教えてもらえると助かるのだけれども。」

ちょっと苦しい繋ぎだったかしら。

そう思いながらも、美穂奈は男から聞き出した情報を頭の中で反芻する。

男の名前は、ラズ＝サプレーン。

美穂奈よりも7つ年上の23歳。

ここは彼の家で、都心部から少し離れた森の中にあるらしい。

婚約者との結婚に逃げ出した形になっている自分が、あの家の姓を名乗って良いのか、咄嗟にそう思い言葉が出てこなかった美穂奈は、苦し紛れに男の名前を聞いた。

元々聞くつもりではいたが、もう少しきちんと自己紹介をし、美穂奈の事を知ってもらった上で聞くつもりだった。

出会い頭いきなり殴って、こっちの印象は最悪だろうから、少しでも印象が良くなるようにと考えていたのに…。

だが、美穂奈のあんな無礼な聞き方に、男は更に怒ったりなどはせず、小さく溜息を吐いた後、上記の事を教えてくれた。

ほとんど単語のみの受け答えだったけど、ちゃんと答えてくれるあたり、良い人なのかもしれない。

「あ、えっと。ラズさん。」

「ラズで良い。僕も、ミホナって呼ぶから。」

年上を呼び捨てにするのはどうなのだろうとは思っが、本人がそう言うのなら出来るだけ要望には応えよう。

「じゃあ、ラズ。」

「何?」

美穂奈の問いに、ぶすつとしながらも答えてくれるラズは、やはり

優しいと思う。

「ラズの髪と瞳って、とても珍しい色ね。何人なの？」

美穂奈がそう問えば、ラズは一瞬不思議そうな顔をした後、すぐに眉をしかめ首を傾げた。

「何人？…オーラー出身だけど？」

「オーラー？」

今度は美穂菜が首を傾げる番だ。

聞いたことない地名だ。

元よりそんなに地名に詳しい訳ではないけども。

日本国内の地名だって、全部わかる訳ではないのだし。

「えっと、それはどこかしら？アメリカ？イギリス？ロシア？」

「アメリカ？イギリス？ロシア…？ミホナ、君が何を言っているのかわからないんだけど？」

「え…？」

不思議そうなラズの顔に、美穂奈も同じ顔で返した。

今、美穂奈は比較的有名な国名を口にしたつもりだ。

なのに、何故ラズは知らないのか。

「ここは、日本…、ううん。地球よね？」

当たり前だと思いつつも、美穂奈は聞いた。

ラズは美穂奈の問いに、何当たり前の事を聞いてるんだって笑ってくれれば良い。

なのに。

「チキユウ？…ミホナ、君が何を聞きたいのかわからないけど。

ここは『カラズcolors』の中心とも言われているオーラー都市の外れにある森の小屋の中、だよ。」

「カラー…ズ？」

ラズの言葉に、美穂奈ただ呆然と呟く。
カラズcolors。

それが、この世界の名前。

この世界…。

そう、私の知っている世界とは違う、別の世界。
異世界の、名前なのだと、それを理解するのに、私は、少しの時間
を要した。

転移魔法と魔法級

ラズから聞いた言葉を、美穂奈は理解すると同時に、今日の前にいるラズをどう陥落するかに頭を悩ませていた。

良くは分からないが、美穂奈は今、異世界にいるらしい。

理解し難いが、それは分かった。

一瞬目を瞑った後に、急に知らない家の中にいたのだ。

それは揺るぎようがない事実。

受け入れよう。

でだ、問題は大きく分けて2つ。

どうやって元の世界に戻るのか、と、どうやってここで暮らしているのか、だ。

元の世界に帰ったって良い事は何も無い。

つまらない婚約者様との結婚が待っているだけなのだから、帰らなくてはいけない目的はあまりなかった。

なので、すぐに帰れなくても、美穂奈的には何も困る事はなかった。ただ、残る問題の後1つ。

ここで、どうやって暮らしていくのか、だ。

すぐに帰れない、または帰らない場合、美穂奈はしばらくここで暮らしていかなくてはいけない。

仕事があるなら、働いて普通の暮らしをおくるのだけれど……。

ただ、美穂奈はこの世界で戸籍もなければ、頼れる親戚知り合いの類もない。

この世界に戸籍があるのかどうかは知らないが、住民登録をしなければ就職するのは難しいだろうし、万が一働けたところで、親戚や知り合いがいなければ、当面の住む場所や食事などの生活費に困る。

と、すればやはりラズをここでなんとかしてでも落としておきたかった。

幸いラズは見た限り一人暮らしの様だし、何より出会い頭いきなり本で殴って気絶させられたのにもかかわらず、今現在美穂奈とこうやって話をしてくれる優しいお人好しだ。

美穂奈はゴクリと息を飲んだ。

この交渉は、失敗出来ない。

「良くわからないけど、君はこの街の出身じゃないって事が言いたいのか？」

「ええっと、そうね。とりあえず、私はオーラー出身じゃないわ。」
答えて美穂奈は天上を見上げる。

何て説明すれば良いのか…。

そこまで考え、美穂奈は首を振った。

いや、下手に嘘は言わない方が良いかもしれない。

だって、ここは美穂奈の知っている常識が通じるのかも分からない世界なのだ。

ちよつとした事ですぐにボロが出てしまう可能性だってある。

その場合、信用問題にヒビが入ってしまう。

ただでさえ、美穂奈は信用されていないのだ。

これ以上、その信用値が下がるものなら、さすがにお人好しのラズとさえ、美穂奈は今度こそこの小屋を追い出されてしまう。

正直に話そうと決めた美穂奈は、少し考えた後小さく息を吐いてラズを見た。

「あのね、ラズ。私の話を、最後まで聞いてくれる？」

美穂奈の真剣な瞳に、どこか投げやりな態度だったラズが姿勢を正した。

「一応、さっきから君の話は聞くように努めているけど？」

「そうね、ラズはさっきから私の話をちゃんと聞いてくれてるわ。そうよね…。」

ラズに、というより自分に言い聞かせるようにそう言って、美穂奈は胸に手を当て、大きく息を吸う。

「ラズ。私自身信じられないんだけど、私、この世界の人間じゃな

いかもしれない……。」

「……………は？」

少しの間の後返ってきた返事に、美穂奈は大きく頷いた。

「待って、分かっている！ラズの言いたいことは凄く良くわかる！！でも、本当なの！私は、地球って惑星の日本国出身なの。ねえ、ラズ、あなた地球って聞いた事ある？日本は？ちなみに、私はc o i
o r s もオーラーも聞いた事ないわ！」

一度声に出してしまえば、不安と疑問の山だらけで、美穂奈はラズが困るだろうと思いつつもまわくし立てた。

そんな美穂奈に、ラズは頭に手を置きながら待ったをかける。

「ミホナ、落ち着いて。」

だが、美穂奈は首を振った。

「いいえ、待たないわ！それに、落ち着けるはずもないじゃない！私は、お義母様達に部屋に閉じこめられてたのよ？なのに、目を瞑って数秒後に目を開けたらこんなところにいるとか、あり得ない！普通に考えてあり得ない！！これは宇宙人の仕業だとも言うの？それとも魔法？どれも非現実的だわ！」

一気にまくし立て、ゼーツ、ハーツと荒い息を吐く美穂奈に、ラズは恐る恐る声をかけた。

「……………えっと、ミホナ？」

「…何よ？」

何か反論出来るならしてみなさいよとでも言いたそうにこちらを睨む美穂奈に、ラズはとてつもない辛そうに口を開いた。

「…えっと、魔法なら、あるんだけど？」

「……………は？」

魔法。

それは常人には不可能な手法や結果を実現する力のことである。

美穂奈は、ぽかんと口を開けたままラズを見つめた。

「魔法…があるの？」

「あるよ。」

さも当然だと言わんばかりにラズはサラツと答えた。

「何、それって物を浮かせたり空を飛んだり？」

「程度によるけど、まあそんな感じの事は出来るよ。」

真実を、異世界から来た、なんて奇想天外な話を、嘘偽り無くラズに打ち明けておいて良かった、と美穂奈は思った。

この世界に魔法があり、それが当たり前だとされているなら、美穂奈はきつとすぐにボロを出していただろう。

その点では自分を高く評価したい。

「ミホナの世界に、魔法はないの？」

ラズの不思議そうな声に、美穂奈は自画自賛を止めて、頷いた。

「ないわ。物を宙に浮かせたり、人が空を飛んだり出来ない事はないけども…。」

科学が発達した現代日本では不可能ではないが、魔法の様に何も無いところから突然何でも出来たりする訳ではない。

「え、ちよつと待って。魔法があるなら、私がここにいても、魔法なの？」

魔法になんか詳しくはないが、転移魔法みたいなのを使えば、そういう事も出来るのではないかと思ひ、美穂奈はラズを見た。

が、ラズは小さく首を振り、その可能性を否定した。

「んと、なんて言えば良いのかな…。魔法はね、たしかにあるんだ。ミホナの言う転移魔法もたしかにある。けれど、魔法には級があつてね。一番難しいとされている魔法はS級ランクと言って、使える人間は

ほとんどいない。次に難しいのがA級、順にB級からG級までの8段階。そのうち、転移魔法っていうのは、この8つの級、どれにも属さないSS級なんだよ。ここまではわかる？」
ラズに言われ、美穂奈ラズに言われた言葉を脳内で復唱する。
魔法と言っても、誰もが簡単に使えるものから、修行を積まなければ使えないような難しいものまである。
美穂奈がここに来ただろう原因の転移魔法はSS級。
そして、S級と呼ばれる高難易度の魔法が使える人間は、ほとんどいない。

「…っと、あれ？ラズ、1つ良いかしら？」
ふと、美穂奈は疑問を感じた。

「どうして、SS級を入れて、9段階にしないの？それに、S級の魔法を使える人間はほとんどいないって…。」

美穂奈はそこまで言っ、1つの答えに行き着き、ラズを見れば、ラズは静かに頷いた。

「そう、SS級を使える人は、もういないよ。あまりの難しさに、取得出来る者がいなくて、随分昔に魔法級から外されたんだ。」

ラズの言葉に、美穂奈は絶句する。
転移魔法は今存在しない魔法。

じゃあ、何故美穂奈はここにいるのか。

転移魔法でないとしたら、どうやってここに来たことになるのか。

「じゃあ、何？魔法じゃないなら、残る可能性は宇宙人？ファンタジーじゃなく、SFな展開なの？」

まさか宇宙人までいるとは言わないわよね。

美穂奈の無言の質問に、ラズは溜息混じりに答えた。

「その可能性を完全に否定する訳じゃないけど、この世界に宇宙人はいないよ。」

「なら、他にどうやって…。」

呟いて、美穂奈は手の中の本に視線を落とす。

赤い革表紙の、金の飾り縁が付いた分厚い本。

いつもは白紙のそのページに、金色の文字が浮かび上がって…。

「……そうよ、本！」

美穂奈ははじめられた様に顔を上げた。

「ラズ！私、この本に金色の文字が浮かび上がって、それを見てたらここに来たの！ねえ、やっぱりこれって魔法じゃないの？」

美穂奈の言葉に、ラズは思い出したと口を開いた。

「そうだよ。ちょっとミホナ、それ見せてくれないか？君が持つてるその本、僕が持っている本ととても良く似ているんだ。ほら。」
そう言っラズが見せてくれたのは、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた、分厚い本だった。

「これはね、僕の曾祖父の形見なんだ。」

「ラズの…？」

「ミホナ、君のその本は、一体どこで手に入れたものだい？」

問われて、美穂奈は自分が生まれてからこれまでの誕生日をずっと思い返す。

気付けば、誕生日の日に側にあつた。

そして、誕生日が終わればいつの間にかなくなっていた。

それは、いつの頃からだった？

中学生の時から？

小学生の時から？

いや、違う。

もっと前から。

気付けば誕生日の日に側にあつたその本は、本当に、美穂奈が気付いた頃には、そこにあつた。

物心が付いた頃には、もうすでに。

多分それは、生まれた時からずっとあつたのではないかと、その可能性に気付いた美穂奈は、一瞬恐怖を感じて、小さく体を震わせたのだった。

エルドと緑の本

「名は？」

生まれたばかりの我が子を抱いていたモウズは、その声に振り返り、驚いた。

そこに立っていたのは、世界最高峰と謳われた大魔法使いである自分の祖父、エルドだった。

「…ラズです。」

「ラズ、ラズか…。」

エルドはそう呟くと、嬉しそうに顔を歪ませた。

「お前達は魔法の才能がからつきしだったが、この子なら…。」
そう呟いて、エルドはラズを優しく撫でた。

「ラズ。お前なら、きっとこの本を読み解いてくれるだろう、ラズ。」

そう言ったエルドの手には、緑の革表紙に金の飾り縁が付いた分厚い本が1冊、握られていたのだった。

「僕の曾祖父は、若い頃とても強い魔力を持っていてね。S級ランクはもちろん、SS級ランクの魔法も少しだけだけど使えたらしい。」

ラズの言葉に、美穂奈は少し驚いた。

何故なら、SS級ランクの魔法を扱える人はもういないと聞いたばかりだったからだ。

「ただ、歳と共に魔力は低下していき、晩年はA級ランクの魔法を使うの

「がやっただったみたいだけど。」

「ラズの祖父、エルド・サプレーンは若い頃、とても優秀な魔法使いとして有名だった。」

「SS級の魔法ランクを使える事から、生きる伝説とも呼ばれていた彼は、歳と共に自分の魔力が低下していくのをとても焦っていた。」

「後継者のラズの祖父もラズの父も、どちらも魔法の才能はあまりなく、C級の魔法ランクしか使えなかった事に、いつも嘆いていたと。」

「僕が生まれてすぐ、曾祖父は僕にこの本を渡し、亡くなったそうだよ。伝説と呼ばれた曾祖父が残した本だから、魔法関連の本かと思っただけだ……。」

「そこまで言っつて、ラズは肩をすくめた。」

「読むのに凄い魔力と集中力がある割りに、中身は普通の小説だったんだよね。曾祖父が何故こんな本を僕に託し、あんなに切実に読み解いて欲しいと言っていたのか分からないくらいね。」

「本を読むのに、魔法がいるの？」

「美穂奈の疑問に、ラズは緑の本を開いて見せてくれた。」

「ごらんの通り、パツと見、中身は白紙なんだ。読む時にこの本に魔力を注いでやると、その間だけ文字が浮かび上がる仕組みなんだ。」

「何かの暗号かとも思っただけど、多分違うだろうと話すラズに、美穂奈はそつと自分の腕の中にある本に視線を落とす。」

「赤い革表紙に、金の飾り縁のある中身が白紙な分厚い本。」

「それが、SS級の魔法ランクを使える大魔法使いと呼ばれたラズの曾おじい様が残した本と良く似ている……なんて、出来すぎている。」

「そして、魔法だ。」

「美穂奈はもちろん、魔法なんて使えない。」

「魔法が本当に実在し、使用されている様な世界があるというのを今知ったぐらいだ。」

「なのに。」

「美穂奈は、ここに来る少し前を思い出す。」

金色の白紙のページに、たしかに浮かび上がった金色の文字を。
ラズは言った。

魔力を注ぐと、文字が浮かび上がると。
美穂奈は、魔力なんてない。

本に注いでやった記憶もない。
なのに、何故…？

「ミホナ？」

呼ばれて、ハッと顔を上げる。

難しい顔をして黙り込んだ美穂奈を心配してくれた様だ。

「あ、えつと…。」

言い淀んで、美穂奈はそつとラズに本を差し出した。

「ねえ。私のこの本も、やっぱりその魔力を注いであげると、文字が浮かび上がるのかしら？私は…、魔法なんてもの使えないから、ラズさえ良ければ、この本を読んでみてくれないかしら？」

「え…？じゃあ、その本も白紙なの？」

ラズの問いに、美穂奈はこくりと頷く。

「ええ、白紙よ。何も書いてない。でも…。」

ここに来る前、私は確かに見た。

金色の文字を。

「そう言えば、ミホナはここに来る前に、その本に金色の文字が浮かび上がったって言ってたよね…。」

呟いて、ラズは少し考える素振りを見せた。

そして、美穂奈を見て、苦い顔をする。

「ミホナさえ良ければ、僕もその本は気になるし、読んでみたいとは思っただけど…。今日は、ちょっと無理かな。こっちの本を読むのに、魔力使い果たしちゃって…。」

そう言っつて、ラズは緑の本を掲げて見せた。

「いつもは少し余力を残しておくんだけど、後少しで読み終わると思っつてつい使い切っちゃったんだよね…。2〜3日あれば回復するけど…。」

「2〜3日…。」

言われて美穂奈は、当初の目的を思い出す。

ラズが言い淀んでいる原因は、多分、ラズが回復するまでの2〜3日、美穂奈はどうするの？と聞きたいのだろう。

そして、美穂奈はどうやってこの世界に来たかではなく、どうやってラズを陥落するかを悩んでいたのだ。

「忘れてた。」

眉間に指を当て、美穂奈は呟いた。

異世界っただけで脳内キャパオーバーだったのに、魔法とかなんか色々有りすぎて、つい失念していた。

まあ、でも、これでラズには頼みやすくなった。

とりあえず、2〜3日はラズが本を読みたがってるんだし、それをエサに泊めてもらえないか交渉しよう。

「ラズ。」

「ごめん、無理だから。」

交渉しようとして、顔を上げて名前を呼べば、ラズから間髪入れずにお断りの返事が返ってきた。

「……………私、まだ何も言っていないよ？」

「ああ、うん。でも、無理だから。」

「……………。」

今までお人好しすぎるぐらい、美穂奈の話を真面目に聞いてくれたいた人とは思えない程の否定っぷりである。

女の子を1人、知らない土地に放り出したりする様には見えないんだけど…。

予想外過ぎると思いつつも、だからといってここで引き下がれば美穂奈は宿無しである。

なんとかならないのかと、美穂奈も食い下がってみる。

「えっと、理由を聞いても良いかしら？私、ラズが協力してくれないと、この世界に知り合いとかいないし、困るんだけど…。」

「わかってる、わかってるんだけど…。うーん…、弱ったなあ。…」

原色と輪廻転生

ラズの発言に美穂奈は一瞬固まった。

簡素なづくりのそれほど大きくない小屋。

ベットや食卓らしきテーブルがある事から、勝手に居住空間だと思
い込んでいた。

そして、そんなところにいる一人の男。

当然、この家の持ち主だと思っていたのだが、違うの？

じゃあ、自分の家でもないこの小屋になんでラズはいるのだろうか？

…空き巣とか？

「あ、いや違った。えっと、僕はここに住んでるんだけど、この小
屋は僕のじゃない…っていうのが、正しいかな。」

「あ、なんだ。借家って事？でも、だからって何で駄目？」

美穂奈の疑わし視線を受け、慌てて訂正したラズに、美穂奈はホッ
とする反面、更に首を傾げた。

居住人数に応じて家賃が変わったりするのだろうか？

「ああ、うん。借家なら別に良いんだけど…。僕はちょっと特殊で
ね。」

「特殊？」

ますます意味がわからないと、美穂奈はさらに首を傾げながらラズ
を見上げた。

「あ…えつとね。僕は、その…国に保護されている立場だから。」

「保護?!」

言われた言葉に、美穂奈は驚きラズを見た。

「え、何？ラズって、天然記念物か何かなの？もしくは、人間国宝
とか？」

「あゝ、うん。どこから説明しよう。」

そう言っって悩むラズに、美穂奈は提案してみる。

とりあえず、どうしてこの家に居座っちゃいけないのかとか、保護

って何？とか、色々疑問はあるけれど。

「…そうね、ラズが良ければだけど。」

そこで一度言葉を切り、美穂奈はラズの灰緑の瞳を見つめて言った。「最初から。一から全部、説明しれくれない？」

どうせ全部分からないのだから、この際一から全部説明してもらおう。

「急がば回れ。多分、それが一番早いと思うのよ。」

カラーズ
colors。

それが、この世界の名前。

この世界の人は個人差があるにしろ、皆魔法が使えるらしい。

そして、その魔法を使う時にもっとも大事なもの。

それが、自分の色。

魔法を使う時に必要な魔力の色は、皆それぞれ違っており、一人として同じ色の人間はいないそう。

ただし、例外がある。

一人として同じ色の人間は存在しないが、それは生きている人間の間で限定らしい。

死んだ人間の色は、次にこの世に生まれてくる他の人間に宿るそう。

少し、地球で言うところの『輪廻転生』という言葉に似ていると、美穂奈は思った。

「そして、その色は、遺伝されると言われている。」

「遺伝？」

「そう。例えば…。母親が赤、父親が青の色を持つていたとする。そうすると、生まれてくる子供の色は母親似の赤系統か父親似の青系統、それとその2つを混ぜ合わせた紫系統の子供が生まれるのが一般的なんだ。」

つまり、血液型みたいなものかな。

美穂奈は心の中でそう呟き、納得した。

地球にはない概念だけでも、似たような概念のものと上手く照らし合わせながら、ラズの説明を理解していく。

詳細は違つかもしれないが、今はとりあえず、大まかに分かっているれば良いと思っただからだ。

「でね、この色カラーなんだけど。特に貴重とされている色が4色あるんだ。4大原色って言って、赤・青・黄・緑は、特に強い魔力を持って生まれてくるとされている。」

「4?」

美穂奈は首を傾げた。

色の三原色。

光の三原色。

美穂奈が知る色の元というと、上記のものがすぐに浮かび上がってくるが、それはどれも三原色。

光の三原色、赤・青・緑。

色の三原色、マゼンタ・シアン・イエロー。

赤とマゼンタ、青とシアンを一緒に考えた場合、たしかに色はおおまかに4つにわけられると思うけど…。

「ミホナ?」

ラズが呼ぶ声に、美穂奈は首を振った。

「ううん。何でもないので。ごめんなさい、続けて。」

美穂奈の常識がこの世界で何になるというのか。

魔法だの色カラーだの言われているのだ。

3原色だろうが4大原色だろうが似た様なものだし、数字が1違うだけの細かい差異は無視する事に決めた。

「大丈夫？続けるよ？」

ラズの言葉に、美穂奈は黙って頷いた。

「色は遺伝だけど、基本的に色転生カラーてんせいって言うのは、血の繋がりが濃いとこを好むんだ。特に、4大原色はね。だから、何代にもわたり原色持ちが生まれなかった場合、ほとんど原色持ちの子供が生まれる確率が低くなってしまっただ。原色ってというのは、魔力が高いつていうのもあるけど、他にも全ての色の源となる色でもあるから、原色の子が生まれないのは色々な色カラーを生み出す可能性を潰す事にもなるんだよ。だから、原色持ちは国から重宝される。」

「へえ…。あ、もしかして、ラズがその原色持ち？」

だから、『保護』なんて単語が出てきたのかと納得しかけた美穂奈に、ラズは苦笑しながら首を振った。

「残念ながら、僕は原色持ちじゃないよ。原色持ちになれる可能性もなかったな。僕の両親共に緑系統だったから、僕がなれる可能性があつたのは緑の原色だけど、僕が生まれた時点では緑の原色持ちはまだ生きていたから。」

「えっと。じゃあ、どうしてラズは保護されているの？」

ここまでの会話の流れからして、原色持ちだから国から重要視され保護されている。

という結論に辿り着かないのは何故なのかと、美穂奈は首を傾げた。

「私の解釈が間違ってる？」

ラズの話をちゃんと理解出来てないのかと思っただが、ラズはそれにも首を振って答えてくれた。

「いや、大体はミホナの思っている通りだよ。まあでも、別に原色持ちだからって、国に特別保護されたりはしないよ。貴重ではあるけど、閉じ込めて大事に大事にされたりとかはないから。僕の友達に、一人原色持ちはいるけど、危険な事をしても特に国に咎められたりはしないし。それは多分ね、原色持ちが死んでしまっても、また次の原色持ちが生まれてくるだろという考えがあるからなんだけど。『色は巡り巡って、またこの世を彩るから。』ってという言葉が

あるぐらいだし。」

それだけ原色持ちが貴重だと国をあげて思っているのに、個を尊重し、原色の血は貴重だからと、種付け様に監禁とかしない国の方針には賛成だけでも、なら何故、ラズは今原色持ちの人間に対する価値を説いたのか。

そこにはやはり、ラズと原色持ちがなんらかの繋がりを持っているからだろう。

どんな繋がりがあるのか、どういった可能性があるのか、自分ならどういう場合保護なんてするのかを美穂奈は考えてみる。

「……………天然記念物。」

「え？」

美穂奈の呟きに、今度はラズが首を傾げた。

「そうよ、やっぱりラズは天然記念物なんじゃないかしら？」

パツと顔を上げた美穂奈に、ラズは眉尻を下げながら深く首を傾げてみせた。

「うんと、ミホナ？君がどこに着地したのか僕にはさっぱり分からないんだけど…？」

「天然記念物よ。知らない？この世界にはないのかしら。」

その言葉にラズが頷いたのを見て、また少し考えた美穂奈はニッコリと微笑んだ。

「じゃあ、今度は私の番ね。私の解釈が正しいかどうか、ラズに聞いてもらいたいわ！」

魔法も色も、4大原色も、色転生も、何一つとして分からないけれども、ここまで説明をうけたのに、ただ最後に答えを聞いて終わりなのは何だか悔しい気がした。

ちゃんと、自分が出した結論があっているかの答え合わせをして欲しい。

だから、いきなりどうして立場が逆転したのか分からずオロオロしているラズを見て、美穂奈はもう一度ニッコリと微笑んだのだった。「こうなったら、最後まで付き合ってね、ラズ。」

その有無を言わさない迫力の笑顔に、ラズは少しの間の後、無言で頷いたのだった。

解釈と野宿

「これは今までのラズの説明を聞いての推測だけれども。」
美穂奈はそう前置きをして、ラズの方へと目を向けた。

「ラズが生まれてきた時、緑の原色持ちの人はまだ生きていて、ラズの曾おじい様はとても強い魔力を秘めた魔法使いだったって事から、私はラズの曾おじい様の色が緑の原色カラーだったんじゃないかって思っているの。で、その原色持ちの曾おじい様は亡くなられた。すると、次に緑の原色持ちが生まれてくる可能性が高いのは、ラズの家系だつて事。一番可能性として高いのは、ラズのおじい様世代の子供だけでも、曾おじい様が亡くなられた後に子供を授かるのは年齢的にアウト。次に可能性として高いのはラズのお父様世代だけでも…。ラズ、弟や妹はいる？」

「…いや、一人っ子だけど。」
突然始まった美穂奈の解釈に質問。

驚きながらも、ジツとこちらの返事を待つ美穂奈にラズは答えた。

「おじ様やおば様はいないの？」

「父も母も一人っ子だったから。」

その言葉に、美穂奈はピツと人差し指を立てた。

「と、いう事は。次に原色持ちが生まれる確率として高いのはラズの世代。ラズの子供つて事になる。ラズの曾おじい様にご兄弟がいる場合、そちらの家系に原色持ちの子供が生まれる可能性もあると思うけれど、多分もう亡くなられてるんじゃないかしら？で、お子様もいない。違う？」

「……あつてるよ。」

ラズは少し感心しながら頷いた。

1から説明して欲しいと言った美穂奈に、ラズは本当に最初から説明した。

けれど、説明はまだ半ば、美穂奈が知りたがっていた何故この家に

置けないのかや、保護とは何かに対しての答えにはまだ何も触れていなかった。

なのに、美穂奈は確信に近付いていると、ラズは美穂奈の説明を聞きながらそう感じていた。

「間違っていたら本当に不吉な事言っただけで申し訳ないんだけど、ラズの両親だけでなく、ラズの家系の人って、みんな亡くなられたんじゃない？で、残っているのがラズだけ。他の緑系統の家系から緑の原色持ちが生まれる可能性はゼロではないけど、ほぼゼロと同じ。何故なら、色、特に原色は血の繋がりを強く求めているみたいだから。原色持ちは貴重で絶対生まれてきてくれなくて困るから、ラズには是が非でも子供をつくって欲しいって事で、国の監視下に置かれてるんじゃない？」

つまりは、数が多い間は放置される動植物達も、数が減り、希少価値が上がれば保護される。

ラズはまさしくその状態なのではないかと、美穂奈は解釈したのだ。どう？違う？と自信満々でこちらを見る美穂奈に、ラズは小さく手を叩いた。

「凄いね。ほぼ完璧だよ。あれだけの説明で良くそこまでわかったね。」

ラズが褒めると、自分の解釈があっていた事が嬉しかったのか、美穂奈が嬉しそうに笑った。

…少し、似てるかな。

ラズは美穂奈のその表情を見て、ふと原色持ちの友達を思い出した。聡明な友人の顔を。

「僕の両親は事故で亡くなってね。曾祖父の世代ぐらいから、子供は1人産まれるか産まれないかぐらいだったんだ。親戚がない事はないんだけど、みんな結構な歳だし、子供は望めないかな。」

「まあ、そうよね。出来ないことはないけど、高齢出産はリスクが高いものね。」

ラズの言葉に美穂奈は頷いた。

「そういう理由から、僕は国の保護を受けていて、不定期にやってくる国からの使者に、定期報告するのが義務なの。だから、悪いけどミホナ。君をこの家に泊めることは出来ないんだ。」
「ようやく戻ってきた話の流れに、美穂奈は頭を悩ませる。事情はわかった。」

けれど、やはりこの家に置いてもらえないのはマズイ。

美穂奈が今この世界で頼れるのは、ラズだけなのだから。

「……どうしても駄目？」

「駄目だよ。僕だって、泊めてあげたいのは山々だけど。………ミ

ホナ、考えてみて。僕が何で国の監視下に置かれているか。」

「え？えつと、だから……、緑の原色持ちが産まれてくる可能性を高める為に、血筋の濃いラズを保護してる……のよね？」

先程証明したばかりの話がまたぶり返してしまった事に首を傾げながら美穂奈は答えた。

「そう。で、子供をつくって欲しくて仕方がない国からの使者がこの家に来たら、僕はいつの間にか女の子と暮らしてるんだ。どう思われる？」

「どつって……………」

想像して、美穂奈は少しだけ頬を染める。

「そうね、そうよね。そういう話になるわね。逃げられないくらいそっち方面に話が進んで、やらなきゃいけないわね。」

国はきつと諸手をあげて私とラズの同居を認めてくれるだろう。

この小屋だって、もっと広くして、ベッドもダブルにしてくれるだろうけど、そこまでされたら是が非でも子供をつくらなきゃいけないのは目に見えている。

さすがにそれは遠慮したい。

「あーもう。でも、どうしたら良いのよ。こんな知らない世界でいきなり1人で暮らしていけって言われても無理よ……。あ、そうだ。

ラズ。ちょっと聞きたい事があるんだけど。」

「何？」

「この世界って、住民登録とかいるの？えっと、身分証っていうか…、そういうのないと、やっぱりこの世界で働いたりするのも難しかったりする？」

美穂奈の言葉にラズは首を傾げたが、すぐに何か思い当たったのか

「ああ。」と頷いた。

「色登録の事かな？自分の色カラーが何色なのか、国に報告する義務はあるね。」

言われて美穂奈は大きな溜息を吐いた。

ここでもまた色カラー。

大事なのはわかったけど、そんな登録までしなくても良いじゃないと美穂奈は心の中で愚痴ってみた。

「もちろん、ミホナは異世界から来て、魔法も知らなかったみたいだから、自分が何色かなんて知らない…よね？」

「知るわけないわ。」

答えて、また溜息。

美穂奈は、これからの事を考え頭を悩ませていた。

頼みの綱であるラズは、この通り駄目。

なら、美穂奈は一体誰を頼りにすれば良いというのか。

右も左もわからない、異世界で、頼れる人間なんている訳がないのに…。

ふとなんとなしに、美穂奈は小屋の窓から外を見る。

たくさんの木々が生い茂る森を見て、美穂奈は暫し考え、何か思いついたと言わんばかりに手を打ちラズを見た。

「ラズ！お願いがあるの！！」

「だ、駄目だよ。ミホナがなんと言っても、泊められないからね。」
申し訳なさそうに、首を振るラズに、美穂奈も同じく首を振った。

「違うわ。泊まるのは諦める。だって、しょうがないじゃない。さすがに、子作りしましょとは言えないわよ…。ただ、そのかわり、毛布か寝袋を一つ貸して欲しいのよ。」

お願いと手を合わせて拝む美穂奈に、ラズは訝しげに眉をしかめた。

「毛布を貸すのは別に構わないけれど…。ミホナ、それで一体どうする気？」

ラズの言葉に、美穂奈は外を指差し答えた。

「野宿するのよ。幸いにも、目の前に森があるし、隠れて潜むには打って付けでしょ？で、その間に解決策を見つけるわ。」

見つかるかは分からないけれど、と口の中で小さく呟く美穂奈に、ラズは呆れた様な盛大な溜息を吐いた。

「ミホナ、君は女の子なんだよ？」

「わかってるわよ。」

ラズに言われずとも、自分が女であることはわかっているつもりだと、美穂奈は頷いた。

「わかってないよ。女の子が森の中で野宿とか、何考えてるの！」

「だってしょうがないじゃない！他にどうしろって言うのよ！…この小屋に泊めてくれないなら、変に優しさ見せないで！」

美穂奈の言葉に、ラズはぐうの音も出ないのか、黙り込む。

「…可哀想だと思うなら、たまに食べ物とか恵んでくれると助かるわ。」

森の中って何か果物とかあるのかなとか、野宿する気満々の美穂奈に、ラズは先程よりも大きな溜息を吐いてみせた。

「……………わかった。良いよ、泊めてあげる。」

たっぷり数十秒の間の後、ラズが呟いた言葉に、美穂奈は驚いて振り返った。

「何言ってるの、ラズ。私、あなたと夫婦になって子供作る気はないわよ？」

「わかってるよ、僕にもない。国には…、なんとか適当に誤魔化しておくから。」

「…なんて言って誤魔化すのよ。」

美穂奈のその言葉には、ラズは答えず視線をそらした。

つまり、行き当たりばったりらしい。

ラズはどちらかというと、計画的に動くタイプの人間に見える。

そういう人間が考えなしに動くとは大抵失敗することを、美穂奈は知っていた。

「ラズ、嬉しいけどちょっと無謀じゃない？逃げられなくなっただから、仕方がないからって理由で子作りとか、ラズだって嫌でしょ？」
「でも…！」

“バンッ”

ラズがそれでも何か言おうとした瞬間、唯一の小屋の出入り口である扉が勢い良く開けられ、ラズと美穂奈は固まった。

まさか、国の使者？

間が悪過ぎる、心の準備が出来ていない、なんて言っただけで誤魔化そう、そんな考えを頭の中でぐるぐる回しながら、美穂奈とラズはゆっくりと、扉の方へと視線を向けたのだった。

来訪者と口論

振り返った先にいたのは、ラズと同年ぐらいの、顔立ち整った金髪の青年だった。

その青年は、美穂奈とラズを見て、訝しげな顔をした。

「リング！脅かさないでくれよ！！」

隣に立っていたラズが、大きな声でそう言って安堵の溜息を吐いたのを見て、美穂奈も緊張で強張らせていた体の力を少しだけ抜いた。とりあえず、国からの使ではないようだ。

ラズの知り合いだろうか？

美穂奈がそう思っていると、リングと呼ばれた青年は、不機嫌な顔全開でこちらを睨んで、怒鳴った。

「それはこつちのセリフだ！ラズ、ためー、何やってんだよ！！」
つかつかとラズとの距離を縮めたかと思うと、リングは勢い良くラズを蹴飛ばした。

「ちょ、何するのよ！」

その行動に美穂奈が抗議の声を上げれば、リングは今度は美穂奈を睨んだ。

「んだよ、つかおまえは誰だ？ラズとこの小屋に一緒にいるっていうのが、どういう意味かわかってんのか?!」

「リング！」

ラズの制止の声も無視し、リングは美穂奈を睨むことを止めなかった。

美穂奈はその眼差しを真っ向から受け止め、頷いた。

「ラズから説明は受けたし、わかってるつもりよ。」

「ほお。じゃあ、おまえとラズはそういう関係なんだな？」

「違うわ。ここに居るのは、やむを得ない事情があったからよ。もう出て行くわ。」

言って、美穂奈はラズを振り返った。

「ラズ、迷惑をかけてごめんなさい。この毛布、一枚貰うわね。」
ベットに置いてある毛布を一枚手に持ち、出て行くこうとする美穂奈の腕をつかみ、ラズは慌てて引き止めた。

「ミホナ、だから駄目だって！僕がなんとかするから、ここに泊って…！」

「ふざけんなよ、ラズ！おまえ、女をこの小屋に泊めるとか、正気か？！」

「リング、これには深い事情があるんだよ。あ、ええっと…。」
言い淀んでチラリと美穂奈を見れば、呆れた溜息が返ってきた。

「ラズ、目の前の知り合いも誤魔化せないのに、国からの使者を誤魔化せる訳ないでしょ？」

正論過ぎて言い返す言葉もない。

「とにかく、放してラズ。次、この小屋にやってくる人間が国からの使者じゃないって保証はないでしょう？」

「ラズ。もちろん、俺が納得いく説明をしてくれんだろうな？」

ラズの腕を振り解こうとする美穂奈に、状況を説明しろとうるさいリング。

美穂奈を引き止める方法を考えなくてはいけないし、リングにこれまでのことを説明しなくちゃいけないし…。

でも、ラズは一人で、同時に説明なんて出来なくて、なのに美穂奈もリングも待つてはくれない。

考えをまとめようとするのに、右からは美穂奈が腕を放してと訴え、左からはリングが説明しろと怒鳴っているので考えがまとまらない。上手いかない苛立ちが募っていき、ラズはとうとう我慢しきれず怒鳴った。

「っつ！ああ、もう！2人共、ちょっと黙ってくれないかな！考えがまとまらないだろう…！」

瞬間、あんなにうるさかった美穂奈もリングも驚いたように目を見開き、2人そろっておとなしく口を噤み頷いたのだった。

「はい。」

おとなしい人ほどキレると怖い。

そんな言葉を思い出しながら、美穂奈は椅子に座り、ラズに言われた通り、静かにおとなしくしていた。

その隣では、ラズがリングにこれまでのあらゆるすじを説明しており、時折リングが美穂奈の方を胡散臭そうな目で見ていた。

良い気分ではないが、リングの反応は正常だと美穂奈は思った。

大体、ラズは美穂奈の言った事を全て素直に信じ過ぎだと思うからだ。

実際嘘ではないけども、もし美穂奈が逆の立場であったなら、いきなり自分は異世界からやってきて、一般常識の魔法についていちいち頭にハテナマークを浮かべ、分からないとか言ってる奴がいたら、「この人、頭大丈夫かしら？」と怪しい者を見る目で見るに決まっているからである。

リングも美穂奈と同じ事を考えたのだろう。

大きな溜息の後に、ラズの方へと向き直るリングを横目に美穂奈は2人の会話に耳を傾けた。

「おまえな……。その話をまるっとそのまま信じたのか？馬鹿じゃないのか？」

「でも、実際急に目の前に現れた訳だし、少なくとも嘘を言ってる様には見えなかったし。」

「嘘吐く人間はみんな嘘吐いてる様には見えないんだよ！大体、おまえ女は嫌いだったんじゃないのかよ、この裏切り者！」

「嫌いだなんて言った事ないよ。ただ、色^{カラー}遺伝の事で保護とかされ

てから、少し苦手になったって言っただけじゃないか。」

「同じ事だろう！それなのに、行くところがないってちょっと泣きつかれたぐらいで泊めるとか、マジありえねえ。」

「だって、しょうがないだろ。でないと野宿するって言うし。」

「させとけよ、野宿だろうがなんだろうが！毛布一枚恵んで放り出せ！！」

「相手は女の子なんだよ？出来る訳ないだろ。」

「女だから何だって言うんだよ。大体、女つてのは虫よりしぶとくできてんだよ。今は冬でもないから凍死の心配もないし、毛布も一枚恵んでやるんだ。外に放り出したぐらいじゃ死なねーよ、俺が保証してやる！！」

「リングは乱暴過ぎるよ。」

「うるせー！つか、おまえがその女を泊めるってんなら、俺はしばらく来ないからな！」

「え、何で？！来てよ！僕だって、さすがに長時間2人つきりは辛いよ！！」

「なら、追い出せ！俺が女嫌いなもの知ってんだろ！！俺は、おまえと違って、苦手じゃなく、嫌いなんだ！！」

「……………ホモ？」

咳いてから、しまったと思った美穂奈は慌てて口をふさいでみたが、どうやら遅かった様だ。

リングが物凄い形相でこちらを睨んでいる。

「ミホナ……。」

ラズが何で喋ってしまったんだと言いたげな視線を投げかけてくるのに、美穂奈は素直に謝った。

「ごめんなさい。あまりにも必死になって主張するからつい……。どうして、そんなに邪険にするの？」

女の子って良いよ、最高だよ！とは言わないけれども、そこまで嫌うには何か理由があるんじゃないだろうか？と、ちょっとした好奇心で美穂奈はリングに問いかけてみた。

けれど、リングは美穂奈を睨むだけで、一向に答えてはくれない。女なんかと喋れるかって事なのかな？

いくら嫌いだからって、無視されるのはちょっと腹が立つ。美穂奈自身がリングに何かをした訳ではないのに。

「……………大した理由もないのに、そういう事言っつて事は、ラズと2人つきりになりたいのにつて解釈で良いかしら？」

「……………っつ！！」

だから美穂奈は反撃に出してみた。

「ミホナ！」

ラズの咎める様な声が聞こえてきたけども、無視をする。

だって、やっぱり何もしてないのにこの態度は腹が立つから。

美形に睨まれると迫力があって怖いけど、ここで目を逸らして負けるのは癪だから、美穂奈はリングの瞳を真っ向から受け止めた。

「ツチ！自分は非力ですつて顔で近付いてきて、守るだけ守つてもらつて、こつちから取れるものは取れるだけ奪つてく。そんな生き物のどこが好きになれる？」

観念したのか盛大な舌打ちの後に答えてくれた理由は、女の子の本質を良く見抜いた良いコメントであると、美穂奈は思った。

けれど。

「それが全てだと思っっているなら、まだまだ甘いわね。一度騙されたくらいで。」

「こんの…！！！」

「よせ、リング！相手は女の子なんだぞ！？」

今にもつかみかかってきそうなりリングにラズが間に入って咎める様に言う。

「だから何だ！その言葉は聞き飽きたつてんだよ！！つか、おまえは何だかんだ言つて女に甘いんだよ！」

怒鳴りすぎて酸欠なのか、リングはそこで一度言葉を切ると肩で息をしながら、呼吸を整えた。

「とにかく、俺はその女がいる限り、ここには来ないからな。」

「酷いな、友達が困ってるのを見捨てるなんて。」
「ぬかせ。その友達の嫌がる事をするとか、とんだDSだろ。」
友達。

その単語に、美穂奈は1つ誰ともなしに頷いた。
どちらかというところ控えめなラズが、先程から言いたいことをビシバシ言っているのに、納得がいったからだ。

逆に、性格が真逆なリングと友達だという事に驚く。

ラズの見た目が文化系の優しい優等生って感じだから、きっとラズと付き合いのある人間もそういうタイプが多いんじゃないかと思っただからだ。

が、リングはどちらかというところ乱暴な不良タイプだ。

上手くいくとは到底思えないのだが、今までのやりとりを聞いている分に、なんだかんだで釣り合いが取れているのかもしれない。

「とにかく、女の子。しかも、異世界から来たって言ってるんだ。身寄りも頼れる人もいないんだ。追い出すのはいくらなんでも可哀想過ぎるだろ。」

「そもそも、俺はその『異世界』を信じてねー。怪し過ぎるだろ。むしろ、何でおまえは信じちゃってるのかが謎だ。」

頭が痛いとしても言いたそうに、リングは額に手を当て、頭を振った。
「だいたい、おまえはこの状況をどう国に説明する気なんだよ。言っとくが、奴等は俺以上に異世界とか信じねーからな。」

「それは……その……。」

言い淀んだラズに、リングはますます頭が痛い眉間に皺を寄せた。
「ラズ。おまえはどっつかつーと物事を順序立てて考え行動するタイプの人間だろ。そういう人間は、不慮の事故に遭遇した場合に弱いんだよ。今ここで言い訳の1つや2つ出てこないようじゃ、本当に国から問いただされた時、何も言えないままだぞ。」
同じ事を思ってるし。

美穂奈はリングの言葉に、何とも言えない気持ちになった。

こんな乱暴者と考えが似てるとか、嫌……とまではいれないが複雑過

ぎる。

「たしかに、リスクは大きいけれど。でも、気になる事もあるし。ミホナを泊めるのはデメリットばかりじゃないと思うんだ。」

「気になることだ？」

「ミホナ。」

呼ばれて、美穂奈はラズが気になると言っている物をリングに見せた。

赤い革表紙の金の飾り縁が付いた分厚い本。

「ミホナは、この本に金色の文字が浮かび上がった次の瞬間にここに来たと主張している。ミホナがここに来てしまった原因になるかもしれないその本が、僕が持っている曾祖父の形見の本とそっくりで、しかも僕がその形見の本を読み終わった直後、ミホナは目の前に立っていた。これは、偶然というには少し出来過ぎていると思うんだ。」

言われて、リングは美穂奈の手の中の本を見る。

リングもラズが読んでいるところを何度も見たことがある。

緑の革表紙に、金の飾り縁。

「たしかに、似てるな。」

色違いの同じ物だろうと切り捨てないのは、ラズの持っている本が既製品ではなく、あの大魔法使いエルドの形見だと知っているから。

「借りても良いか？」

リングの言葉に、美穂奈は黙ってリングへ本を差し出した。

リングはそれを受け取ると、パラパラとページをめくる。

「ミホナの本もページは真っ白だから、僕のと同じ魔力を注いであげて読めるんじゃないかなと思うんだ。今日は魔力を使い果たしちゃったし、回復したら読んでみようかと思ってるんだけど……。」

「いや、無理だろ。」

ラズの説明をぶった切り、リングは美穂奈の本をパタンと閉じた。

「え？無理って、どういう事？」

意味がわからず、美穂奈はリングとラズの顔を見る。

が、ラズもリングに言われた言葉が意外だったのか、不思議そうな顔をしていた。

「ラズ、おまえは自分の本を普通に読めるから忘れてるみたいだけどな。おまえの本とこの本が同じ性質の物だった場合、おまえにも俺にも読めねー、つかこの世界で読める奴がいるかが怪しい。」

「……………あ。」

リングの言葉に、ラズは何か思い当たったのか小さく声を漏らした。

「いや、でも！あり得ないよ、リング。」

「…ど、どついう事？」

何か焦った様なラズの声に、美穂奈も何だか不安になってきてそう問いかける。

「つか、それはこっちのセリフだな。」

だが、その問いに答えたのはラズではなく、リングだった。

リングは、美穂奈と視線を合わせる様に腰をかがめると、至近距離で美穂奈を値踏みする様に見つめ、言った。

「…おまえの色は何色だ？」

魔法道具と制約

「何色って、言われたって…。」

リングの瞳から逃げるように、美穂奈はラズを見た。

「…リング。ミホナは魔法のない世界から来たんだ。魔法も、色も知らないらしい。もちろん、自分の色もね。」

「それは、知らないだけ…だろ？」

リングの言葉に、どういう事だと美穂奈は眉根を寄せた。

「魔法を知らねーつつう設定らしいから特別にいちから教えてやるよ。」

ラズの時とは違う、嫌味としか思えない言い方。

けれど、知らないのは事実で、ちゃんと順序立てて説明してくれるのは有り難い事だから、美穂奈は文句を飲み込み、何も言わずにリングを見た。

「ラズの持つてる緑の本は、ラズの曾祖父であるエルドが作ったものだ。読む時に読み手の魔力を注いで文字を出現させる特別仕様魔法道具マジックアイテムに分類される。」

リングはラズの緑の本を取り、その表紙を開きながら続けた。

「…魔法マジックアイテムに級があるのは知ってるか？」

聞かれて、美穂奈は一つ頷いた。

「ラズに、聞いたから。」

「そうか。じゃあ、そこは省く。」

リングはあっさりと言うと、魔法道具マジックアイテムについての説明を続けた。

「魔法マジックアイテムに級があるのと同じで、魔法道具マジックアイテムにも級が付いている。S級ランクからC級ランクの4段階だ。魔法道具マジックアイテムつてのは、使う時に大抵制約が付いていることが多いんだが、この級が高ければ高いほどややこしくて面倒臭い制約が付いていることが多い。ラズの持つてるこの本はA級ランクで、ご他聞に漏れず、面倒臭い制約が付いている。」

言って、リングは緑の本に向かって、何事か小さく呟いた。

「ミホナ！」

ラズに呼ばれ振り向くと同時に、急に腕を引かれ、美穂奈はバランスを崩しながらラズの腕の中に収まった。

“バチイイ！！”

その直後、鋭い音が耳を刺し、美穂奈は驚きに体をビクリと震わせる。

何が起きたのかと恐る恐る顔を上げれば、リングの手の中の緑の本からバチバチと光る緑色の電気の様なものが見えた。

「リング！ミホナに当たったらどうするんだ！！」

「知るか。適当に避ける。」

ラズの抗議の声を適当にあしらいつつ、リングは美穂奈を見た。

「この本の制約は、ランク級と色。カラーこの2つ自体はそれ程珍しい制約じゃない。魔法道具を使う際の制約は大抵この2つのどちらかだからだ。

ただ、この本はその両方が制約にあり、しかも縛りがキツイ。級制ランク約つてのは、簡単に言えば魔法道具と同じ級の魔力を注ぎつて事だ。

この本の級はA。ランクつまり、A級以上の魔力を注いでやらないと文字は浮かんで来ない。B級や、C級しか使えない魔法使いじゃ中身が

読めないって事だ。」

A級以上。ランク

ラズの説明でS級の魔法を使える者はほんの一握りだけだと聞いた。つまり、A級の魔法を使える人間もそんなに多くはないだろう。

それだけでも、A級以上という縛りはなかなかに厳しいと美穂奈は思った。

「色制約つてのは、該当する色を持つ者でしかこの魔法道具を使えないって事なんだが…。色の種類については聞いたか？」

「…4大原色についてなら。」

美穂奈の答えに、リングは面倒臭そうに髪をかき上げた。

「ああ、そうか。原色だけか。クソ、話があちこち飛びやがる。」
説明の説明をする事に、リングは煩わしいとばかりに髪をかく。

「原色が4種しかないのに対し、色の種類は割と多い。というか、

正確には原色からの派生色なんだけど。」

「いまいち意味がわからないと美穂奈が頸を傾げると、ラズが横から口添えしてくれた。」

「例えば、さつき色^{カラーいでん}遺伝の時に、母親が赤で、父親が青でつて例え話したでしょ？その結果、産まれてくる子供が紫の色^{カラー}を持つてる。」

「つまり、紫は赤と青の派生色つて事。でも、紫にも色々あるよね。」

「紫だけでも、母親よりの遺伝だと色は『赤紫』に、父親よりだと『青紫』になる。この場合は、どっちの派生色かハッキリしててわかりやすいけど、母親と父親両方五分の遺伝だった場合、赤と青、どちらの派生色か難しいよね。その場合、その子供は赤系統なのか青系統なのか分類するのは難しい。」

「ラズの説明に、美穂奈はなるほどと頷いた。」

「そう。だから、原色とは別に色^{カラー}に種類を設けた。赤系統・橙系統・黄色系統・緑系統・青系統・紫系統・茶系統・灰色系統・黒系統・白系統。他にも水色だの桃色だのあるが、今はこれだけわかれば充分だ。」

「リングはそう言うのと、本に関する説明に戻った。」

「大体の魔法道具の色制約^{マジックアイテム カラーせいやく}っていうのは、少なくとも2種以上ある。例えば、緑系統の色もしくは赤系統の色^{カラー}のどちらかですて感じた。」

「そして、その場合の複数は何らかの法則性がある。例えば、補色であったり、同系色であったり、暖色・寒色であったり。……補色とかはわかるか？」

「さすがにそれは美術で習ったと、美穂奈はリングに頷いてみせた。」

「補色は、お互いの色を引き立てるもの。同系色は色相環で隣り合う色。暖色は赤系統や橙系統で、寒色は青系統や紫系統でしょ？」

「美穂奈の答えに、リングは頷いた。」

「シキソウカンが良くわからねーが、まあ大体あつてるし、進めるぞ。」

「リングは緑の本の表紙をパンと軽く叩いた。」

「だが、この本の色制約は『緑系統の色^{カラー}』のみなんだ。他の色^{カラー}持ち

が本を読もうと魔力を注ぎ込むと、さっきの様な事になる。」

「さっき？……あ。」

言われて、美穂奈は先程の鋭い音を思い出した。

「この本には、違う色カラーの魔力を注がれた場合、攻撃してくる仕組みになってるな。まあ、相殺したけど。」

だからラズは慌ててかばってくれたんだと知り、美穂奈がラズの顔を見上げれば優しい笑みとかち合い、美穂奈は勢い良く顔を下に向けた。

：リングではないが、女の子が苦手と言う割に、ラズはうっかりときめいちゃうくらい女の子に優しいと思う。

「…聞いてんのか？」

美穂奈の態度が気に入らないのか、低く凄んでくるリングに、美穂奈は大きく頷いた。

「大丈夫！聞いているわ！！続けて！！！」

美穂奈の言葉に、ラズは頸を傾げ、リングは特大の溜息を吐いた。

「でだ、ここからは俺の推測だが、この本の2つの制約のうち、色カラ制約カラーせいやくの定義がおかしい気がするんだよ。さっきも言ったが、色制約カラーせいやくつてのは、大体、対になる何かしらの色カラーが存在する。単色でつて前例がないんだ。今日この日まで、エルドが作った本だし、例外なのかなと思っていたんだが、おまえが持つてるその赤い本を見て思った。この緑の本と赤い本の魔法道具マジックアイテムは元は1つの魔法道具マジックアイテムなんじゃないかってな。緑の補色は赤だ。その本の革表紙の色とも一致する。」

言われてみれば、色が違うだけで全くと言って良いほどよく似た本だ。

『対』であったと言われても、納得がいく。

美穂奈は赤い本を見た。

魔法のない地球にいた時から、誕生日になると現れた不思議な本。

この本は、何故美穂奈の前に現れたのだろう。

「だがな。」

と、まだ続いていた説明に、美穂奈は本から視線を外し、リングを

見た。

すると、先程美穂奈に「何色だ？」と聞いてきた時と同じ鋭い視線に射抜かれた。

「この仮説が正しかったとして、その本を縛る制約はA級以上の赤系統の色、魔力を注ぐ事。おまえが、その本に金色に光る文字を見ただとしたら、おまえはその本に魔力を注いだんだ。…A級以上の赤の色をな。」

リングの鋭い視線に、尻込みしそうになるのをなんとか堪え、美穂奈は答える。

「私は魔法なんて使えないって言ってるでしょ。たとえ、無意識のうちにも魔力を注いだとしても、A級とか、この世界の人間だって使える人がそう多くない難しい魔法、無意識で使える訳ないじゃない。」

その美穂奈の言葉に、リングは口角を緩め、笑った。

「そうだな。無意識で使うには難易度の高い魔法だ。が、それもおまえの色次第だ。」

「ど、どういう意味よ？というか、あなたは信じてないでしょうが、私は異世界から来たのよ。色自体ないわ。」

「じゃあ、どうやって本の文字を出した？」

「それは…。本自体に魔法が定着していたとか？」

そんな事があるのかどうかも知らないけども、美穂奈が適当に答えると、リングは面白そうに笑った。

「まあ、その可能性もない訳じゃないが、ほぼゼロだ。その場合、この本に魔法と魔力を定着させなきゃいけない。しかも、長い年月それだけで、魔法道具の価値が一気にA級からS級、いや下手したらSS級に跳ね上がる。エルドがこの本を作ったのは晩年になってからだ。全盛期ならまだしも、いや、全盛期でもそれだけのものが作れたか怪しい。それ程、おまえが言ってる理論は難しいんだよ。」

何も言い返せない美穂奈に、リングはさらに続けた。

「異世界から来て色なんて持ってないと主張したいなら、おまえに色があるって『例え』で話を続けようぜ。例えだよ、俺の推測だ。」
言い方はむかつくが、たしかに今ここで色があるかないの水掛け論を
していては話が進まない。

美穂奈はリングの例え話に乗ることにした。

「おまえの色がうつかりこの本に流れ込み文字が浮かび上がったとして、その場合のおまえの色は赤系統だ。だがな、ここで1つ問題がある。この世界で赤系統つつたら、数百年前に途絶えたとされているんだよ。」

「…え？」

ど、どういう意味だと美穂奈はラズを見上げた。

「僕と同じだよ。赤の原色持ちが死んでからいくら待っても、次の赤の原色持ちが産まれて来なかつたんだ。そうこうしているうちに赤系統の色を持った一族は皆死んでしまい、血脈が途絶えた。それから、数百年、赤の原色持ちは未だに産まれてこないことから、赤の原色持ちは途絶えたと言われている。」

「そう、だから国は緑の原色持ちが同じ運命を辿らぬ様、必要以上にラズを保護する訳なんだけどな。赤系統の色は途絶えたつても、一応派生色の桃系統や橙系統は無事だから、完全に赤の原色持ちが産まれてくる可能性が途絶えた訳でもないんだが。」

それでも、ラズの説明では原色は特に血筋の濃い場所を選ぶと聞いた。

何百年も経ってしまったら、濃いもへつたくれもない。

可能性は、ゼロと言ってしまっても良いぐらいに低いのだろう。

そんな貴重な色が、私の色かもしれないの？

「おっと、まだ納得するなよ。」

リングの声に、まだ何かあるのかと美穂奈は眉間に皺を寄せた。

「色制約の謎が解決しても、級制約の謎がまだだろ。」

「…そうね。もし仮に私に魔法の才能があったとして、色が赤系統だとしても、A級以上の強い魔法が使える可能性は低いわ。」

美穂奈の言葉に、リングは頷く。

「そうだな。でも、可能性が1つだけある。」

「リング。でもそれはいくらなんでも突拍子もなさ過ぎるよ。」

リングの可能性に、ラズは気付いているのかそう抗議するのを見て、美穂奈もその可能性とやらを考えて見る。

強い魔法を使える可能性。

無意識レベルでも、強い魔法が使える天性的な強い魔力…。

「…まさか。」

「馬鹿ではないみたいだな。」

リングの初めての褒め言葉に、「けれど」と美穂奈は首を振った。

いくらなんでもありえなさ過ぎる。

「もちろん、ちゃんとした色分析カラーぶんせきもしてないし、あくまで俺の推測、想像だ。けれど、割と高い確率でおまえの色カラーは、途絶えたとされている赤の原色である可能性が高い。」

原色。

それは、生まれながらに強い魔力を宿しているとされる全ての色カラーの元となる4つの色カラー。

赤・青・黄・緑。

その中で、既に途絶えたとされる赤の原色。

原色は、血の繋がりの濃い場所を好む。

では、美穂奈の体に流れている血は、どこかで元赤の原色持ちと繋がっているのだろうか？

わからない。

自分の身に流れているその血の正体がわからず、美穂奈は恐怖にただただ自分の体を抱き込むようにして、目を閉じたのだった。

本の色と魔法の色

「ミホナ、大丈夫？」

ラズの声に、美穂奈はゆっくり目を開けた。

「顔色、悪いよ。」

「……大丈夫。」

答えて、美穂奈はリングを見た。

この際、自分の色が赤だろうが青だろうが、それはどうでも良い。けれど、原色、血の繋がりの濃い場所を好むとされている原色が自分の色だというのには、どうしても賛同出来ない。

だから、美穂奈はリングの言う可能性をどうにかして打ち砕けないかと口を開いた。

「……私が、赤の原色持ちの可能性より、この本に魔法や魔力が定着していて、魔法道具としての価値、^{マジックアイテム}級がSS級だ^{ランク}って言う方が可能性として高いんじゃない？」

「ま、そうだな。この本の級自体がもつと上である可能性。この本は実はラズの持つてる本と対でもなんでもなく、ただの本の可能性。対だったとして、^{カラーせいやく}色制約が赤系統でない可能性。おまえが異世界の人間だ^{カラー}って言うなら、おまえの世界で色という概念がない^{カラー}んではな^{カラー}く知らないだけでみんなが色を宿していた場合、おまえが赤系統であつてもおかしくない可能性。あげたらキリがない。まあ、いくつかの可能性なら今ここで潰せるが。」

言って、リングは美穂奈の赤い本を手を取った。

「ミホナ！こつち来て！！」

ラズに腕を引かれ、美穂奈はラズの背の後ろへと隠れる。

その動作に、リングがまた本に魔力を注いでみるのだと理解した。

「俺の色は黄色。この本の色制約が、^{カラーせいやく}黄系統の色以外^{カラー}だった場合、もちろん本は読めない。で、この本がラズの本と対だった場合、多分さつきみたいに攻撃されるだろう。その時の、攻撃魔法の色を見

れば、この本自体の色カラーがわかる。」

「…どういう、意味？」

不安からか、知らずラズの服の裾を握り聞く。

「さつき、ラズの本に攻撃された時、見たか？緑色の電撃みたいなもの。」

言われて、美穂奈は頷いた。

バチイイと鋭い音の後、本の周りには、緑色に光る電気みたいなものが走っていた。

「魔法を使うには、自分の色カラーで魔力に練り、それで律を編む。難しく考えず、自分の色カラーが、魔法にも影響を与え色がつく程度に思ってる。俺の色は黄色だから、俺が使う魔法はみんな黄色に色付く。」
言って、リングは本を持ってない方の手で、宙に何かを描くように指を滑らせた。

瞬間、小さな黄色い火がついた。

「わかるか？ラズが同じ魔法を使えば緑の炎になる。」

言って、リングが手を握ると、黄色い火はあつと言う間に消えてしまった。

「それと同じで、魔法道具マジックアイテム自体にも色カラーが存在する。基本的には作った人間の魔力を元に構成される訳だから、作成者と同じ色カラーになる。ラズの本であれば、エルドが作ったものだから、緑系統の色カラーだな。

おまえの赤い本が、エルドの作ったこの緑の本と対の場合、エルドの色カラーである、緑系統の色カラーの可能性が高い。」

「待つて。それじゃあ、おかしくない？私の本の色カラー制約は赤系統だつて話じゃなかったの？なら、その本の色カラーは赤系統じゃないの？」

美穂奈の質問に、リングは首を振る。

「いや、違う。級制約ランクせいやくは、魔法道具マジックアイテムと同じ級の魔力を必要とするが、色制約カラーせいやくは同じとは限らない。そもそも、色制約カラーせいやくが2種以上あるのが普通なんだから、同じ色カラーでなくてはいけないうのが既に矛盾だろつ。」

言われて、たしかにそうだと美穂奈は頷く。

「…ややこしいわ。」

「まあ、全部わかれとは言わねーよ。とりあえず、やってみて、この本の色が黄色だった場合、俺が中身を確認出来るし、違った場合この本の色が判明する。…何も起きなければ、ただの本だ。」
言って、リングは先程ラズの本にしたのと同じく、口の中で何やら小さく呟いた。

瞬間、目の前にあるラズの背中に緊張が走ったのがわかった。

素早く先程のリングと同じ様に、空中に何かを描くと、ラズの周りに緑色の光の粒子が舞い上がった。

そして、最後にラズが何か呟くのと、凄まじい音が耳に届くのは、ほぼ同時だった。

“バリバリバリツイイツイツツ!!”

「ひゃああつ！」

近くで雷が落ちた様な轟音に、美穂奈は目を瞑りラズにしがみついた。

「くっ…!!」

ラズの辛そうな声に驚いて目を開けると、辺り一面赤い光に包まれていた。

「何、これ？」

「ミホナ！触っちゃ駄目だ!!」

そつと手を伸ばして触ろうとした瞬間、ラズに大きな声で制止され、美穂奈は慌てて手を引っ込めた。

それと同時に、赤い光も徐々に弱くなり、消えた。

「な、何が起きたの？」
ドサツ。

「え？ラ、ラズ!!」

呆然とその景色に見入ってた美穂奈を現実に戻したのは、ラズが倒れる音だった。

「ラズ？ラズ、大丈夫?!」

慌ててしゃがみ込み、額や頬を触ると、「うっ。」と小さなうめき

声がラズの口から漏れた。

顔色が悪く、脂汗をかいていて、見るからにやばそうな感じではあるが、どうして良いのかわからず、美穂奈は首を巡らせる。

「何、どうなって…。そうだ……!!」

ふと思い出したもう1人の人物を探し美穂奈が振り返った先には、赤い本を地面に取り落とし、膝を付いてやはり苦しそうにしているリングの姿だった。

「ちょ、大丈夫?!何、どうしたの2人共!!」

ラズと違い、かろうじて意識のあるリングに美穂奈が問いかけると、リングは苦しそうに一度息を吐き出した。

「マジかよ。」

呟いて、赤い本を睨むリングに美穂奈は更に声を張り上げた。

「ねえってば!!」

「わりい、ちよつと、後にして……。」「ドサッ。」

「あ!ちよつと、待ってよ!!ねえ!!」

限界と言わんばかりに床に突っ伏してしまったリングに、美穂奈は意味がわからないと部屋の中ぐるりと見渡し、呟いた。

「…どうしたら良いのよ。」

この世界に来てすぐと良く似た光景にデジャヴを感じながら、美穂奈はどうして良いかわからず、しばらくその惨状に呆然とするのだった。

看病とライフライン

ふっと意識が上昇する感覚に、リングは目を開けた。

地面が近く、倒れていると理解するのに数秒。

体を起こそうとして鉛のように重く動かないと理解するのに更に数秒。

仕方がないので、ゆっくりと首だけ巡らせると、額から何かはずり落ちた。

「あ、気が付いた？」

声のする方を見れば、茶色のふわふわした髪を肩口まで伸ばした少女がこちらを心配そうに見下ろしていた。

「……………あー。えっと。」

何が起きたのかわからず、とりあえず声を発して見ると、なんだか物凄く喉が渴いており、声もカラカラだった。

「…大丈夫？起きあがれるなら、ベットに移動して欲しいんだけど。」

「…そう言いながら、リングの額からずり落ちてしまったものを拾い上げ、少女はリングに手を差し伸べた。

「…女の子の手を借りるなんてまっぴらゴメンだと言いたところだが、今の状態じゃ到底一人で起きあがれる気がせず、リングは黙ってその手にすがった。

「…その状態じゃ、ラズを運んでもらうのは無理そうね。」

「…そう言われ、視線を巡らせれば、お人好しの友人が地面に倒れているのが見えた。

額には濡れたタオルが置かれ、体には毛布が被せてあり、自分もきつと同じ状態だったのだからとリングは鈍くなった頭で思う。

「…かろうじてベットに辿り着き、半ば倒れるように横になれば、そっと体に布団をかけられる。

「…水…は、飲めなさそうね。とりあえず、今はもう一眠りした方が

良いわ。おやすみなさい。」
額に置かれたタオルが冷たくて気持ちが良い。
リングは言われるままに目を閉じ、もう一度眠りについたのであった。

ゆっくりと目を開ければ、ぼやけた視界の中に、少女の後姿が見えた。

「ミホナ？」

カラカラの声で呼ぶと、振り返った美穂奈の黒くて大きな瞳が自分をとらえた。

「ラズ！大丈夫？」

心配そうに駆け寄ってくる姿に、ラズはほっと息を吐いた。

「ん。怪我とかない？」

「私は大丈夫。それより、ラズは？何がどうなったの？」

見れば、ベットに横になっっている口の悪い友人の姿。

きつと、意味も分からず自分達が倒れてしまつて心細い思いをしたのかと思うと、申し訳ない気分になった。

「ああ、今はそれはどうでも良いわ。とりあえず、起きれる？ベットは今いっぱいなんだけど、ソファーに移動しましょ？床よりはマシなはずだし。」

そう言つて、差し伸べてられた小さな手をラズはつかんだ。

「……………ラズ、大変なのはわかるんだけど、ちよつとだけ力入らない？さすがに、私の力じゃ支えるのが限界で、引っ張り上げるのは無理だから。」

言われて、全く力の入らない体を叱咤してなんとか体を起こした。

「こつち、ゆつくりね。」

重いだろつに、一生懸命ヨタヨタと歩きながら支えてくれる美穂奈にラズは心の中で感謝した。

やっとの思いで辿り着き、ラズは倒れるようにソファ―に体を沈めた。

「ラズ。水、飲める？」

美穂奈の言葉に、ラズは小さく頷いた。

一口飲んだだけで、生き返るような、そんな感覚がした。

「じゃあ、ラズももう一眠りして。おやすみなさい。」

体に毛布の、額に濡れたタオルの感触を感じながら、ラズはそのまま再び眠りについた。

「さて、と。」

ラズに毛布をかけ、美穂奈は小屋の中を見渡した。

とりあえず、我に返った美穂奈はラズとリングの様子を改めて観察してみた。

医学の心得はないが、とりあえず外傷はなさそうだし、見た目から過労じゃないかと思った美穂奈はしばらく2人を寝かせておくことにした。

ラズには悪いが、小屋の中を漁らせてもらい、毛布と濡れたタオルでとりあえず応急処置。

本当はベットに運びたいが、いくらなんでも気絶した男の人を運ぶ程の力はなかったので、心苦しいが床に放り出したままだった。

けれど、先程一時的に目を覚ましてくれ、それぞれベットとソファ

ーに移動してくれたので、少しホツとした。

リングは水を飲む前にダウンしてしまったので、枕元に水差しを置き、美穂奈は改めて小屋の中を見渡した。

2人が過労で倒れたのだとしたら、しばらく休ませて、食事をとればそれなりに元気になるだろうと思っっているのだが。

美穂奈は小屋の一角を見て、少しだけ眉尻を下げた。

「…料理はそれなりに出来るんだけど、いかんせん竈かまどを使った事がないのよね。」

そう、先程は「生活スペースなんだ、へ〜」程度で見えていたが、よく見ればこの小屋の中は美穂奈にとって違和感の固まりだった。まず、台所が竈かまどで、水は水道でなく、外の井戸からだったし、トイレとお風呂が見当たらない。

「電子機器が1つもないし。」

食材の入った箱は、冷蔵庫でなく文字通りただの箱だった。

ただ、魔法かなんなのか、コンセントも差していないのに、箱の中はひんやりとしており、食材が傷む心配はなさそうだった。

「もしかして、魔法があるから、科学がほとんど進歩していない？可能性としてはありそうだが、ただこの小屋は都心部から少し離れた森の中にあるとの事なので、この小屋の中だけ時代に取り残されているという可能性も捨てきれない。」

「…どっちにしても、困ったわ。」

食事は作れず。

医者を呼んでくる訳にもいかず。

後はラズとリングが目覚めるのを待つしか出来ない。

美穂奈は椅子に腰掛け、息を吐く。

ふと、視界のすみに赤い本をとらえ、美穂奈は知らず難しい顔をする。

あの時、何が起きたのか、美穂奈にはサッパリわからなかった。

リングがラズの本にしたように、自分の魔力を注ぎ、攻撃された場合リングの魔法で相殺するはずだった。

危ないからとラズが美穂奈を背にかばいながら、リングがそれを実行し、本がただの本なのか、ラズの本と対なのか、ついでに本の色カラーを調べようと、そういう話だったのに。

リングが魔力を注ぎ込んだ瞬間、ラズの背中に、たしかに緊張が走った。

指で宙に何か描いていたのを見ると、ラズは魔法を使った？

ラズの本に魔力を注ぎ込んだ時とは比べものにならない程の大きな鋭い音。

目を開けたら、真っ赤な光が小屋全体を包んでいた。

あれがあの本の攻撃だったのだろうか？

でも、だとするとこの小屋の中に被害が全くないのが不思議だった。小屋の中は、どこかが木っ端微塵に吹き飛んでいたり、家具などがぐちゃぐちゃになったりなどの荒れた様子は全くなかった。

ただ、ラズとリングだけが、倒れてしまったのだ。

人体にだけ影響があるのならば、美穂奈がこうしてピンピンしている事の説明もつかない。

「直前にラズが魔法を使って守ってくれた？」

赤い光は、ラズと美穂奈を避ける様に小屋の中を包んでいた。

美穂奈が光に触れ様と手を伸ばした時に、ラズは駄目だと美穂奈を叱っていた。

「…なら私が無事なのはわかるけど、同じ条件のはずのラズが倒れるのはおかしいわよね？」

やはり、わからない。

この世界で生きていくなら、魔法をもっと深く勉強する必要があると、美穂奈は改めて思った。

「さてと。」

美穂奈は椅子から立ち上がり、背伸びする。

本当は食事を取ってもらいたかったんだけど、美穂奈が作れないとしたら諦めるしかないだろう。

途中で目を覚ました時用にラズの枕元にも水を置いてと。

2人の様子を見る限り、多分今日はもう説明を求めるのは無理だろう。

明日の朝、2人の様子を見てから考えよう。

美穂奈は、小屋を漁った時に見つけた予備の毛布を引っ張り出す。正確な時間はわからないが、外は日が落ち暗くなってきた。

美穂奈も今日一日色々な事があり過ぎて疲れてしまったので、少し早いかもしれないが眠る事にしたのだ。

ただ、どこで寝るかだ。

ベットにはリングがいるし、ソファーにはラズ。

他に、ベットのかわりになりそうな家具はない。

まあ、それ自体は別に良い。

来た時同様、体が痛くなるかもしれないが床で寝ても良いのだし。

だが問題は、寝ている間に国からの使者が来ないとも限らない事だ。もし、最悪な状況に出くわした場合、ラズとリングはこの状態だし、きつと美穂奈一人では誤魔化せない。

万が一、どちらかの意識が戻ったとしても、ラズは起き抜けすぐに言い訳がスラスラ出てこないだろうし、リングはきつと美穂奈の味方をしてくれないだろう。

だとすると、安全策を取るしかなかった。

幸い、先程水を汲みに外に出たが外は寒くもなければ暑くもない、ちょうどいい気温だった。

リングも、今は冬ではないとから凍死の心配もないと言っていたのだ。

夜になって急に氷点下になって冷え込む心配もなさそうだ。

「ラズ、怒るかしら？」

呟いて、美穂奈は森の中で野宿する為に、小屋を出て行ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5970y/>

colors

2011年12月11日14時48分発行